

調査報告

作業療法学科入学前学生に対する課題分析

—作業療法士になることをめざして—

向井聖子・大川浩子・木村浩一・深澤孝克・池田官司

The Analysis of the Theme Description on Pre-enrolled Students
in the Department of Occupational Therapy

—With the Aim of Becoming an Occupational Therapist—

MUKAI Seiko, OHKAWA Hiroko, KIMURA Koichi, FUKAZAWA Yoshikatu and IKEDA Hiroshi

はじめに

北海道文教大学新設作業療法学科平成19年度初回の入学生を迎えるに当たり、作業療法学科設置準備室では、受験生を対象に「作業を通して健康をサポートする」をキャッチフレーズにホームページを開設した。その内容として、作業療法士は生活の作業の成り立ち、機能、意味などの特性を理解し、生活する人の新しい作業へのチャレンジを援助するすばらしい職業であることを説明した。さらに、生活様式の複雑な変化に対応しつつ、今後必要とされる保健、福祉、教育の領域そして新しい領域にも立ち向かうことのできる柔軟で力強い作業療法士の誕生の志を投げかけた。

当大学前年度オープンキャンパスにおける高校生に対するアンケートによると、「理学療法と作業療法の違いがよくわかった」や「体験が

できればよかった」等の感想があり、実体験によって高校生たちが作業療法の理解をより深めたいと感じていることが理解された。山本ら¹⁾は、入学前と入学後の作業療法・理学療法学生に対して各療法士のイメージを調査したところ、両学科の4割の学生が入学後のイメージに変化があったと答え、イメージに変化のあった学生の7割が作業療法学科学生であったことを報告している。これは、作業療法学科の学生は、入学前の作業療法の理解が不十分な傾向があることを示している。

そこで当準備室では、入学前学生に対して作業療法や作業療法士の仕事を理解し必要な勉強の準備を進めてもらうことを目的として作業療法に関連した参考図書を提示しその感想文を提出する課題を考案した。今回、その課題「自分のなりたい作業療法士」の読書感想文の内容を分析した。感想文の内容は、「作業療法士に関

して」と「対象者に関して」に大きく二つに分類されたのでその結果をここに報告する。

方法

対象)

課題は、平成19年度作業療法学科合格者48名を提出対象とした。(内47名分の感想文を回収) 性別 男24名 女24名(内社会人入学生3名) 生年1964年～1989年生まれ 学歴 高校卒46名 大学卒1名 専門学校卒1名 出身高校 道内44名 道外4名

課題)

課題は参考図書(資料1参照)から一冊以上を読み、テーマ「自分のなりたい作業療法士」の感想文を1,000～1,200字程度にまとめることとした。課題案内文は一般入試合格発表後の2

月中旬に学生に発送した。入学後の4月作業療法学科オリエンテーション時に感想文を回収し、2週間後に感想内容を4-6名の小グループで意見交換し、話し合いの内容をまとめ、各グループ代表者が発表する形式をとった。

推薦本の選択方法と設置)

各専門分野の作業療法士教員が作業療法を理解するための推薦本をあげ、その中から10冊を選定した。推薦本の内訳は、作業療法の仕事を理解するもの2冊、作業療法の専門分野別の当事者やその家族の方が書いた本と疾患に関する本8冊を選択した。また図書館担当者の協力によって、課題とする推薦本を図書館に納入し入学者が推薦本を借りることができるように手配した。図書館担当者は、作業療法学科入学課題用の特設コーナーを図書閲覧室に設置し入学前学生の対応を行った。

資料1 参考図書リスト

1. 作業療法士の仕事を理解するために役立つ本
 - ・作業療法士まるごとガイド 日本作業療法士協会/監修 ミネルヴァ書房 2006年
 - ・スウェーデンの作業療法士 大変なんです でも面白いんです 河本佳子/著 新評論 2000年
2. 高齢期の障害に関連した本
 - ・私は誰になっていくの? ―アルツハイマー病者からみた世界 クリスティーン ボーデン/著 檜垣 陽子/訳 クリエイツかもがわ 2003年
 - ・痴呆を生きるということ 小澤 勲/著 岩波新書 2003年
3. 身体障害・発達障害に関連した本
 - ・レーナ・マリア レーナ・マリア/著 ビーヤネール多美子/訳 瀬口巴/訳 小学館 1998年
 - ・お母さんは、ここにいるよー脳障害児・夏帆と過ごす日々から 河田真智子/著 毎日新聞社 2006年
4. 進行性の疾患に関連した本
 - ・告知されたその日からはじめる私のガン養生ごはん 柳原和子/著 主婦と生活社 2003年
 - ・かわいくて、わがままな弟 金沢絵里子/著 講談社 2005年
5. 精神障害に関連した本
 - ・心を病む人と生きる家族 古川奈都子/著 ぶどう社 2006年
 - ・なんとかかなるよ統合失調症 がんばりすぎない闘病記 森実恵 解放出版社 2006年

分析

学生の読んだ本は表1のとおりである。(複数の本を選択した学生もあり。)提出された47名の感想文をデータとして、オープンコード化²⁾を参考に、文章のコード化とカテゴリー化を行いカテゴリー間の関連性、類似、相違、パターンなどの視点から内容の分類を行った。データの信憑性、再現性に関しては、データの開示とカテゴリー化の過程の検証を作業療法学科教員2名が実施し、再カテゴリー化を確認した。

表1 学生を選択した本

タイトル名	選択した人数
作業療法士まるごとガイド	25
スウェーデンの作業療法士	9
私は誰になっていくの？	1
痴呆に生きるということ	2
レーナ・マリア	3
かわいくて、わがままな弟	3
お母さんはここにいるよ	6
心を病む人と生きる家族	3
なんとかなるよ統合失調症	1
ママもう泣かないからね	1
大学小論文	1
心のリハビリ体のリハビリ	1
リハビリ医が脳卒中になった時	1
見てみたい先輩OTの頭の中	1
あなたは私の手になれますか？	1
作業療法士になるには	1

結果

「自分のなりたい作業療法士」をテーマとした感想文の内容は、A.作業療法士に関して、B.対象者に関しての二つに分類された。

A.作業療法士に関して

「作業療法士に関して」は、A-1)「作業療法士の仕事」 A-2)「対象者との関係性」 A-3)「新たに知った事柄」から構成された。A-1)「作業療法士の仕事」は、「目的」・「対象」・「範囲」・「治療的手法」・「技能」のカテゴリーを含めた。A-2)「対象者との関係性」は、「信頼関係」・「作業療法士の姿勢」のカテゴリーを含め

た。A-3)「新たに知った事柄」は、「仕事の内容」・「仕事の印象」と「自分にとって必要なこと」のカテゴリーを含めた。

B.対象者に関して

「対象者に関して」は、「対象者の範囲」・「病気の知識」・「当事者の幸せを問う」のカテゴリーから構成された。これらは同時に「新たに知った事柄」のカテゴリーでもあった。これらの分類を図1とした。

A.作業療法士に関して

A-1)「作業療法士の仕事」

「目的」作業療法の仕事の目的は、生活に対する援助とし、自立した生活、楽しく暮らすその人らしい生活、社会復帰があげられ、精神的サポート、心のケアの表現が記述された。

“障害の無い人と差のないよりよい日常生活ができる...生活の自立達成を補佐する仕事をしたい...明るく笑顔の作業療法士になりたい。”

“障害があっても楽しい生活が送れるように援助する作業療法士になりたい。”

「対象」対象は、患者さん、家族、地域住民とあり、幅広い年齢層であった。

“幅広い年齢層の人と会ってみたい。人と接することが好きなのでさまざまな人と出会い対応する力をつけていきたい。患者さんのことを、まず第一に考えなおかつ自分も楽しく仕事ができればよいと思う。”

「範囲」仕事の範囲は、現在行われている作業療法以外のことを行いたいや地域における活動、行事への参加や地域の子供の行事に対する活動といった地域活動への参加を希望する記述があがっていた。

「治療的手法」治療的手法は、①作業 (①-i 作業の作用、①-ii 作業手段の活用、①-iii 作業の目的活用) ②対人交流 ③個人的因子 ④社会活動 ⑤環境 ⑥予防的手法 ⑦治療手法

の開発などがあがっていた。

①-i) 作業の作用の活用 “一緒に何かを取り組むことで通じ合うことができる”

①-ii) 作業活動の手段の活用 “作業を手段として使用する”

①-iii) 作業の目的的活用 “いろいろな視点から目的にあった作業活動をするをめぐりたい” など作業を活用することの特色を捉えた表現が書かれていた。

②対人交流 家族の愛 コミュニケーションなどの活用

③個人的因子 特技・趣味の活用
“..趣味や特技によってリハビリが違うと考えられるので、その人にあったリハビリを見つめるような作業療法士になりたい。”

④社会活動 ボランティア活動・社会交流など医療施設のみにとらわれず社会活動や、将来的に期待する作業療法の活動があがっていた。

⑤環境 生活環境・社会環境への関わりの必要性

“環境面と精神面のバリアフリーに努めたい。障害者が自立した生活ができるようサポートできる作業療法士になりたい。”

⑥予防的手法

⑦治療手法の開発 “ファッション、理容の活用で治療手法の拡大をはかりたい。”

「技能」技能は、①治療過程の技能 ②作業療法士の技能があがっていた。

①治療過程への技能 変化を観察できることとした観察能力、楽しい生活が可能となる技能（具体的な記述はなし）話を聞くことができるなどのコミュニケーション能力など。

②作業療法士としての技能 理解力（立場や気持ちが理解できること、個々を尊重できること）、観察能力（変化に敏感である 心と体の二側面に視点が向くこと）の必要性があがっていた。

“小さな変化を見逃さない..次の治療のステップにつなげていける作業療法士になりたい...”

A-2) 「対象者との関係性」

「信頼関係」 作業療法士と対象者との関係性においては、信頼関係を築くこととし、その上で個々の心の支え 安心感 落ち着きの場の提供を与えることがあがっていた。

“信頼される作業療法士になりたい”

“今何を必要としているのか、長期のかかわりの中で信頼関係を築き患者さんの必要性を感じ取ることのできるセラピスト、患者さんとの密な関係を築くことができる作業療法士になれるようにがんばりたい。”

“落ち着いて安心できるような心のケアのできる作業療法士になりたい。”

「作業療法士の姿勢」は、①対応 ②態度があがっていた。

①「対応」 補佐的対応 前向きな対応 根気強さ 思いやりがあがっていた。

“長い時間、不安や混乱の中に置かれている人たちに前向きな気持ちで対応していきたい”

②「態度」 患者の希望を知る態度、分け隔てなく接する態度、明るさや笑顔を絶やさない態度、また対等な立場に立つこと、一対一の関係や他職種との連携の方法を利用することがあがっていた。

“人として分け隔てなく、人と接することができる存在になりたい。”

A-3) 「新たに知った事柄」

「作業療法の仕事に関して」は、①仕事の内容 ②仕事の印象があがっていた。

①「仕事の内容」 生活全般のサポートを必要とする 日常生活への工夫 スムースに暮らせるような工夫 けがのリハビリと考えていたが幅広い対象 手段が広いことがわかったなどがあがっていた。

“日常生活の作業訓練を目的として料理やスポーツをしたり訓練自体を楽しみながらやるという工夫をしていて、そんな発想にととても感心したり、リハビリに取り組む手段の広さに驚きました。”

- ②「仕事の印象」すばらしい・最高の職業
助け喜びを見出す仕事 やりがいのある仕事
“人を助け、人を幸せにすることができるとともに喜びを見つけていくことが最高の職業だとおもうからです。” “.. 本当に親身になっている姿に感動した。”

生きる喜びを見出す援助や親身になって努力することに対する作業療法士の仕事ぶりへの感動が記述されていた。また対等な立場で倫理観を持って対応する作業療法士の仕事の特性に感動する記述が見られた。さらに作業療法士がこれからの時代に求められる仕事であることや社会に対してあまり周知されていないことの指摘もあがっていた。

「自分にとって必要なこと」は、自己成長や障害を持つ人に対する偏見に気づいたことがあがっていた。他に経験、物事への探究心の必要性があがっていた。

“豊かな作業療法士になるべく勉強に励みたい。”

“障害のある人を少しだけ見ただけで変な人と思い、関わることを避けていた。普通の人と同じコミュニケーションをとり、人を理解することが必要である。”

以上、作業療法士の仕事は、心と体のケア・回復を援助する、自立した生活、生活全般のサポートをする仕事 協力助け合う仕事、患者も自分も楽しくなる仕事としての理解が得られていた。

“言葉がだめでも、表情がだめでも一緒に何かに取り組むことで通じ合うことができると思う。この職業は人との関わりが無くては成り立たない仕事である、患者さん、家族、地

域の方などたくさんの人たちと協力、助けがあつてこそ仕事だ。.. いつでもどこでもどんな人にもでも元気を与えてあげられるような作業療法士になりたい。”

B.対象者に関しては、

「対象者に関して」は、①「対象者の範囲」②「病気の知識」③「当事者の幸せを問う」内容が含まれていた。

- ①「対象者の範囲」対象者だけでなく家族も一緒に人生を共にすること、援助が無い状況もあること、精神障害のあること、先天性障害のある人に対しても作業療法の範疇であることを知らなかった記述があがっていた。

“当事者だけでなく周りの家族も一緒に人生を歩むことに気づいた。障害をもつ人に心の傷を少しでもケアの手助けとすることやその家族の人にも信頼関係を気づくことができることも目標に入れて..”

- ②「病気の知識」長期の不安・混乱状態があること、具体的な対象者の状況を理解する感想があった。

“普通に話す言葉が痴呆の人にとっては妄想や誤解をまねくことがあることがわかった” “周囲から満足な援助や手助けの受けられずに自分の生涯に絶望を感じて生きている人もいるだろう..”

- ③「当事者の幸せを問う」病気の人の生きがいを問う意見があがっていた。

“健康だけが幸せの源なのか 病気の人は生き生きと輝くことは許されないのか？”

などの生きることを提供する作業療法に関連した根源的なテーマに触れる記述があり、作業療法という仕事の醍醐味に触れる感想があがっていた。

考察

新設作業療法学科一年生を迎えるにあたり、学生たちの作業療法に対する具体的な知識を提供されることが期待されている。推薦入学者は社会人入学者よりも実際にOTの働く場面を見学したり話を聞く経験が少ない事が報告³⁾されており、作業療法の見学知識、体験的知識がすくない現状があることが理解される。入学前に作業療法士としての仕事を理解することは、入学後一年次から開始する教養科目とそれに続く専門科目の一連の授業への学習意欲の向上が期待できる。さらに高校生を対象とするオープンキャンパス等における学生の参加は、作業療法を説明する機会でもあり、学生自身が作業療法の理解を深め、作業療法士を目指す学生として職業意識の向上につながることを期待される。高野⁴⁾の報告による看護学科、理学療法学科、作業療法学科、社会福祉学科含めたS大学医療福祉学部一年生162名を対象とした各専門職種に対するイメージの調査では、理学療法士が「リハビリをする」の回答が多いのに対して、作業療法士は「わからない」の回答が最も多く具体的な仕事のイメージがつきにくい傾向が報告されている。また、山本ら¹⁾の理学療法学科・作業療法学科80名に対する調査では、入学後のイメージの変化する原因として、作業療法士の仕事が、表面的な情報収集だけでは捉えにくい複雑な職種であることを述べている。一方、向⁵⁾は、「あまりわからないまま入学したが、『臨床を体験して』あるいは『仕事には魅力を感じる』など自然に作業療法の職業を肯定する学生が多い」ことを報告している。これらのことは、作業療法は具体的なイメージがつきにくい、入学後の学習や臨床体験などによって、作業療法という仕事は学生に興味を与え専門職としての魅力があることを学生が次第に理解していく傾向があると考えられた。

今回の課題分析によると、学生は作業療法の仕事の目的・技能・治療的手法に関しては理解を得たと考えられた。特に治療的手法は「作業」の活用が多様に記述されていた点や他項目にわたっていることがその理由としてあげられる。しかし、その内容はやや断片的で具体的な理解を得たということでは難しいかもしれない。なぜなら、対象者に対する記述として、対象疾患や疾患の特徴などの基礎医学知識に関すること、作業療法士が対象とする問題点、作業療法の期間、治療する場所など実践的な記述がわずかであることが理由としてあげられる。これらの事柄は、入学後専門分野で学習する範囲であるが、参考図書を手がかりに学習することは可能な事柄である。今後の対策として作業療法を知るための最低限必要な実践的で具体的な項目を考案し学習指針としての検討も必要と考えられた。また、今回多くの学生たちが特定の本を選択したことは、参考図書内容の全体のバランス、選択冊数など次回に向けての検討が必要である。

課題記述の中では、作業療法士としての技能として「話しを聞けること」、「立場や気持ちが理解できること」や専門職としての姿勢、人間成長への視点が含まれており、谷岡ら⁶⁾の入学前学生の作業療法士の姿勢と同様な見解があることが理解された。これらの表現は学生ができることとしての真摯で積極的な姿勢として判断された。さらに、当学科学生が、対象者との関係性において信頼関係を重視し、特に患者の立場を尊重する意見がみられたことは具体的に作業療法場面を想定し対象者を理解しようとする姿勢を今回の課題学習で学んだと考えられた。

「新たに知った事柄」として、対象が広範囲でありさまざまな分野があること外傷による障害だけではなく精神障害や先天性障害も含まれることなど、学生は作業療法士の仕事を新たに知ることができた。障害に対する認識や

作業療法士の仕事のすばらしさ、人間性豊かで柔軟な対応を必要とする資質などを学習できたと考えられる。さらには、障害を持った人に対する生きがいや健康の意味などの作業療法に関連するテーマに対して疑問を持ったことは、学生にとって最大の収穫であったと考える。疑問を出発点として各個人の興味を探究することを期待したい。彌田ら⁷⁾は、入学後の作業療法学科学生が実際に学習する科目数の多さや、内容の難度に戸惑いを感じていることを報告しているが、入学前に大きな疑問や興味を持つことをきっかけに、作業療法士としての専門職に必要な科目やさまざまな領域への興味を関連付けながら、勉学の励みとなることを期待したい。

まとめ

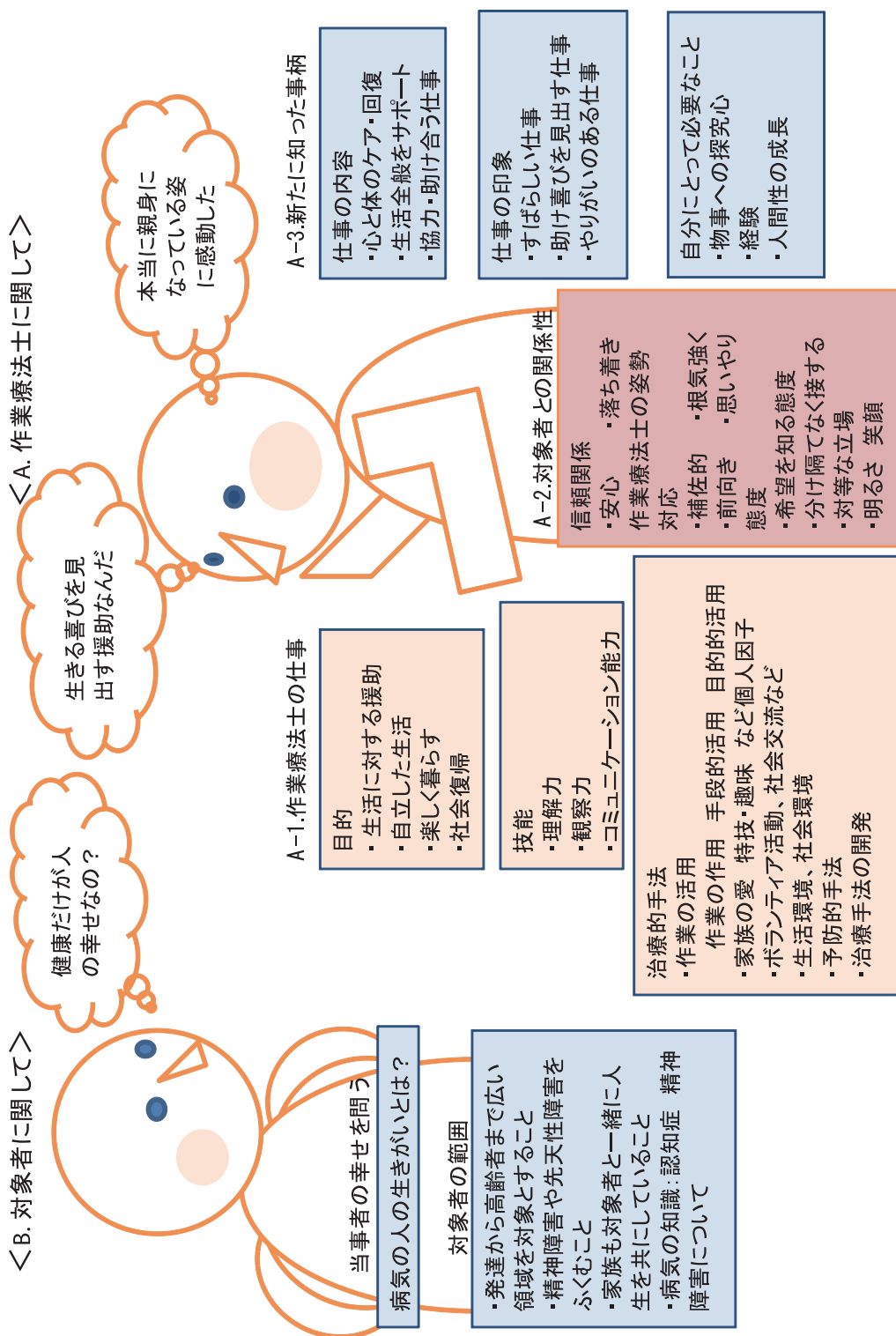
当学科では、入学前学生に作業療法を理解する、作業療法士の仕事を理解することを目的として参考図書を提示し感想文の課題を提案した。感想文の内容分析の結果、作業療法を理解することに関しては、作業療法の目的、治療的手法の理解を得ることができた。作業療法士の姿勢に対して、学生として真摯で意欲的な記述があった。それらは作業療法士としての必要な資質を含めていた。また当事者に対する理解を得たことで、専門職としての疑問を持つものもいた。課題によって学生が得た作業療法の知識をもとに、今後の入学前課題の検討と作業療法士をめざすための勉学指針の検討が課題となった。

参考文献

- 1) 山本弥生, 他: 学生の理学療法士・作業療法士に対するイメージの変化について. 国立病院総合医学会: 59: 304, 2005.
- 2) 南 祐子: 質的研究のすすめ グラウンデッド・セオリーの技法と手順. 医学書院. 1999.
- 3) 西川智子, 他: 作業療法学科における入学選抜方法と入学後の経過について. 藍野医療福祉専門学院紀要: 14: 74-81, 2000.
- 4) 高野里美, 他: 看護, 理学, 作業, 社会福祉学科大学1年生の職業イメージの相違. 日本看護学会教育学会誌: 10: 226, 2000.
- 5) 向 文緒: 作業療法学専攻学生の職業レディネスと職業意識. 作業療法: 24: 328, 2005.
- 6) 谷岡三千代: 作業療学科に入学した学生における将来の志向性に関する調査の一考察. 作業療法: 22: 473, 2003.
- 7) 彌田剛, 他: 学生の作業療法に対する入学前イメージ —現代学生は「作業療法」をどう捉えているか—: 作業療法: 21: 374, 2002.

(2008年1月24日受稿)

自分のなりたいたい作業療法士 図1



Abstract

As new students enrolled in the Department of Occupational Therapy, Hokkaido Bunkyo University in April, 2007, we planned to propose a description written on the theme of "Occupational therapist you want to be" with the purpose of getting the knowledge of occupational therapy and its work. By the results for analyzing the description, it was considered that they had not correctly understood the knowledge concerning occupational therapy, but that they had understood the purpose and the methods of the occupational therapy. In the description of the occupational therapy tasks, there were some statements that strongly and honestly motivated students in the category of occupational therapist's attitude. When the students understand the clients' lives by reading books, they may have some questions to become a specialist. We should consider the theme and the selection of books for students. And we need to consider bringing out the students' talent to study ambitiously.